

転向の軌跡——三好十郎ノート (一)

高 橋 新 太 郎

「なぜ、三好十郎なのか」、『三好十郎との対話——自己史の追及⁽¹⁾』の著者宍戸恭一は、その第一章を次のような言葉で書き始めている。

強い力で私を捉えていた言葉が、次々に死語となつて逃さかって行く。曰く、革命（反体制）運動。曰く、学生運動。曰く、転向論。曰く、世代論。曰く、政治と文学論……等々が、それだ。『現代史の視点⁽²⁾』（一九六四年）はその最初の記録であるが、それならば、訣別したものの代りに、私は何を抱んだと言うのか。

これからはじめる（三好十郎との対話）で私の中に生きはじめたものを明確にしたいと思っている。そして、もし、この（対話）が失敗に終るならば、そのときは私自身が死語になるしかほかに、逃げ道は無いものと覚悟している。

——略——

「革命的」イデオロギーを信奉していた時期の私の内部世界は、コチコチに氷結していた——私の目にうつる世界は、「革命的」と「反革命的」の二色しかなく、人間も「安全な奴」と「危険な奴」の二種類しかいなかつた。現代史研究会を始め（一九五七年）、小山弘健の『戦後日本共産党史』を出版し⁽³⁾（一九五九年）、『講座現代反体制運動史』第二卷（一九六〇年）に共著者のひとりとして参加した頃迄、私のこのような状態は続いていた。

人間を「安全な奴」と「危険な奴」とに差別視するなどということは、傲慢な輩にしかできないことである。私がこのような傲慢な人間の類であったのは、体制に対するむき出しの憎悪を、「革命的」イデオロギーに直結させていたことに原因があつた。当時の私は、生きた屍であり、自我喪失者であつた。——略——

私は思想とイデオロギーとを区別して対目的有効性のあるものを思想と呼び、対他的、即目的有効性から捉えられ

た思想は思想ではなく、イデオロギーと呼ぶことにしている。マルクス主義を信奉していた時期の私を「イデオロギー至上主義」者と言うのは、それがためである。

ところで、対自ら化なるものが、自己の思想に絶えず能動的なエネルギーを保証し、思想の動脈硬化（イデオロギー化）を予防する効力があるからして、自己の「内なるイデオロギー至上主義」とのたたかいには極めて有力な武器になることを最初に私に教えてくれたのが、三好十郎である。

このノートを書き綴ろうとしている筆者高橋には、六戸におけるようなラジカルな「政治的体験」はない。ただ、一軍国少年として戦中を過ごし、戦後民主主義の洗礼を受けて生きてきた者として、魯鈍ながら政治に無関心に生きることはできなかつた。なにを抛り所として自己を生きるかに苦渉する過程で、三好十郎の著作との出会いもある。そして、次代に受け継がるべき、文学的思想的遺産として三好十郎の存在を自らにうけとめている。庶民の、生活者としての論理と実感を核とし、挺子として、自己の転向体験を（思想）として内実化し、その作家的生涯を押した。貫いた三好十郎、「眞の知識人とは、たえずノイローゼにおびやかされつゝも、どこへも脱出せず、それに耐えて病的なノイローゼにはならず、自分の属している社会全体をどんな種類の絶対主義にも渡さぬための抗毒素として存続しつづける者のことだ」（知識人のよろこばしい本務とのるわしい運命のこと）とした三好十郎の生の軌跡を重く見る。

かつて高橋は明治書院の『現代日本文学大事典』（昭和40・11刊、久松潜・木俣修・成瀬正勝・川副国基・長谷川泉編修）で「三好十郎」の項を執筆した。この事典は中項目主義と小項目主義を折衷した編集であったが、中項目にとりあげた作家については、類書に比して、かなりな紙数を割り当て、三好十郎の場合、四百字詰原稿用紙二〇枚程であったと思う。内容はともあれ、この種の事典類で、「三好十郎」の項目に最も紙面を割いたものであった。その二書前の中稿で、父母に生別した十郎を、三歳の時から十二歳に至るまで老いの生涯をかけて厳しく慈愛した母方の祖母トシの姓を、三好自身の記述に倣つて納富としたが、大武正人の追跡調査によれば、祖母トシは夫と死別した時、入籍しておらず、終生、副島姓だったという。これに限らず、この「三好十郎ノート」を書き記す所以の一つは、旧稿の不充分を、今に補い検討し直すことで、執筆者としての責を幾分なりとも果そうとすることがある。たとえば、満

田郁夫が、大武正人・川俣晃見が編集し、堺誠一郎・稻垣達郎・本多秋五が名を連ねた『三好十郎の仕事』(全2巻)及び別巻・昭和43・9、『學藝書林』の書評『日本文学』昭和44・6)の中で提出した、三好十郎の「転向」に関する疑問がある。満田は大武らの労を多としつつ、次のようにいう。

……転向ということが三好十郎を読み解く上の重要なポイントであろうと思う。にも拘らず……三好十郎に於ける転向ということとの内容がよくわからないのである。そして、そのことには編者らの責任も多少あろうと思う。……第一巻の解説でも前号の大武氏作製年譜でも転向について一言も触れていないのはどうしたことだろう。大正十二年に二十二歳の三好十郎がみなみならぬ覚悟で左翼運動に入ったことは年譜にも見え、川俣氏も強調していることである。昭和三年二月に齋井繁治らと左翼作家同盟(芸術同盟?)を結成したことは、年譜に記されているが、その後の三好十郎の運動内での進退については、年譜にも解説にも全く記載がない。特に運動離脱の時期が全く示されていない。

これに統いて満田は、高橋によると、左翼芸術同盟はまもなくナップの一派として結成されたプロットに参加し、彼の戯曲は新築地劇團・左翼劇場などで上演されている、とした上、前記明治演劇院の『現代日本文学大事典』の拙稿の一節、この前後(昭和七年前後か——引用者)から、組織内部の根強い公式主義や政治主義にあきたらぬものを感じていた三好の心は、やがてマルクシズムそのものに対する疑惑へとひろがり、プロットを脱退して運動から離れたことになった。八年、『せき』(中央公論)五月の発表につき、世界文化協会の機関誌『文化』創刊号に「バルザックに就ての第一のノート」を発表したが、これは、友人に与えた手紙の体裁をとり、バルザックを語ることをとおして、自らの藝術觀を表明した、彼の転向宣言ともいいうべきものであった。

を引いた上、次のようにいう。

編者らは当然こうしたことを知つていて触れないであろうが、そうした立場(つまり三好十郎の場合には転向はなかったと考える立場)もあるうと思ひながらも、どうも穏然としない。一つには、大正十二年に、編者らが書いているような非常な勢いでとびこんで行った運動から、その十年後に身を引くといふことが一人の人間の生活にとって大きな出来事でない筈はないと思うからであり、二つには、昭和八年と言えば、「バルザックに就ての第一のノート」

が発表された七月には、佐野学・鍋山貞親の「共同被告同志に告ぐる書」が『改造』『文藝春秋』など各誌に掲載され、雪崩的な転向がおきた年である。三好のプロット脱退が独自なモチーフに基いていても、彼はこうした時代の波から全く超然としていることはできなかつたろう。と私が推測する。……

この「三好十郎ノート」は、さしあたり、満田が問題としているような、三好の左翼運動への参加と、それからの離脱の時期に焦点を当てて稿を進めることがある。「プロット脱退の正確な時期」を確定できずとも、かつての曖昧な記述を、追跡検証によって、より明確なものとしたい。

なお、三好十郎の遺児三好まりは、ライフワークとして、決定版三好十郎全集刊行を悲願として準備を進めていると聞く。昭和三四六年六月に白木茂が作製し、五七年五月に三好まりが改稿完成した詳細な年譜を含む「資料 三好十郎」(『日本演劇学会紀要』20号、昭和57・9)も発表されている。拙稿「ノート」は、この著作を参照しつつ、管見に入つて「資料」に洩れているものを、頃末にわたって紹介引用してゆく積りである。拙速主義を事としない、決定版全集刊行のために、いささかでも役立てば幸いである。

まず、満田もとりあげている大正十二年における三好の、左翼運動との関わりについて検討する。『三好十郎の仕事』別巻(昭和43・9)の大武正人作製の年譜に次の一節がある。

……この冬、既に左翼運動に身を投じて、官憲の彈圧を考慮し、中学校の先生から贈られ所蔵していた青木繁の絵『虹の松原よりひれふり山を望む』(スケッチ版四号)を日夏に贈り、以来ふたたび訪ねることをしなかつた。……

講談社の日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(昭和52・11)の大武正人執筆の「三好十郎」の項に次の記述がある。

……一二年冬、左翼の運動に関心を抱いていて、官憲の彈圧を考慮し、中学校の先生から贈られ所蔵していた青木繁の絵『虹の松原よりひれふり山を望む』(スケッチ版四号)を日夏に贈り、以来ふたたび訪ねることをしなかつた。……

「資料 三好十郎」（昭和57）の三好まり作製の年譜には、次の記述がある。

……この冬、左翼運動にはしる気になつた十郎は、身边整頓のためか恩師日夏耿之介に、自分が所蔵していた青木繁の絵（虹の松原よりひれふり山を望む／スケッチ版四号）を贈る。

「或時突然に青木繁の絵を持っていらして主人に下さるというので主人がそんな貴重なものを貰うわけにはゆかないと申しますと自分は左翼の運動をしているので何時どうなるかわかりません。先生の所へおいでいただけば安全ですからと申されておいてゆかれました、それは大正十二年冬の事で絵のウラに主人が書き入れてございます。先年故あってしらべてみましたところ明治四十三年第十月佐賀にある日青木生と御署名があり鶴君に呈すとしてございます。この絵は青木繁画集にはのって居りませんが年譜によりますと同じ年の十月に大略血をされたようでございますし、翌年の春に亡くなられましたので病床でおかきになったという藤山愛一郎様御所蔵の二枚の外は、油絵では再晩年のお作のようでございます。この絵を持つていらして下さいましてからお目にかかるお目にかかるよかったです。この絵がございませんが三好様がこの絵を持っていらしたのはたしか中学の先生が三好さん。——中略——しかとした記憶ではございませんが三好様がこの絵を持っていらしたのはたしか中学の先生が三好様に下さったのだそうです」（日夏耿之介夫人鶴口モエ子様よりの手紙による。三好十郎の仕事の第一巻の川俣亮自の解説文にあるが、十郎自身は、これらのことについて生前、だれにも語らなかつたし、文章にもいっさい書いた形跡はない。）

前後するが大武は、『定本三好十郎全詩集』（昭和45・9、永田書房）の「解題ということ」次のようにいう。

……恩師日夏耿之介に、「自分は左翼の運動をしているので何時どうなるかわかりません先生のところへおいでいただけば安全ですか」（日夏夫人のお手紙）と言つて、愛蔵していた天才画家青木繁の絵を贈っているのである。日夏先生にお訊ねして、この事実をたしかめた篤学の先輩川俣亮自は、「三好十郎が大正十二年冬すでに『左翼』の運動をやっていたという事実」について「重要なこと」であると注意を促しているが、その通りであると共感したところから合点のゆかぬ奇妙な思いをもつてゐる。

それは、官憲の弾圧が身边に及ぶかも知れぬ危惧を感じるほどに「左翼の運動」に身を投じて行つた三好青等が、まだ「解放戦線上の一人の雑兵たらん事を最大の目的」（自伝）としての、プロレタリア詩の作制はせず、若き象徴派詩人としての詩作の発表を大正十五年までつづけていたのだ。このような事実について川俣亮自氏は、「左翼転換」の行われた後、「しかもなお三好十郎は日夏耿之介の峻厳な唯美主義的魅力に引かれつづけて、「雨夜三曲」「賽

の河原」、ウイリアム・ブレーク論（卒業論文）を書きつけ、大正十五年末に至つてようやくこの魅力から脱却することができたということになるであろう」と述べているが、…………この人の理性は、「解放戦線上の一人の雑兵」であるとする意欲をもちながらも、天性の芸術家の魂は自己の創造の欲望に忠実であったということなのではなかろうか…………。

と結論づけている。大武が引用している『三好十郎の仕事第一巻』（昭和43・9）の川俣の「解説」には、川俣に宛てての日夏夫人の返信も全文紹介されており、その上で、次のように記している。

……もっとも重要なことは、三好十郎が大正十二年冬にすでに「左翼の運動」をやっていたという事実である。すなわち三好十郎は、関東大震災の年に高野山、大阪、奈良への旅から「九月半ば頃」に帰京して、「生涯からのノート」を書いておいて、左翼運動に入つたにちがいないのである。…………

あえて、くだくだしく引用を重ねて来たのは、これら通常の記述・判断に強い疑念を抱くが故である。いずれも、日夏夫人ないしは日夏耿之介から得た情報を唯一絶対の拠り所とする点で共通するが、その絶対視する日夏サイドの情報に、時の経過による記憶渾融の誤認はないのかということである。大正十二年冬に三好が青木繁の画を恩師に贈つたことは間違いない。だが、そのことと、三好の左翼実際運動とを短絡させ、直接的に結びつけるのは如何がなものか。たとい三好が、その種のことを口にしたとしても、青木の画を師に呈する際の軽い措辞であつたかも知れぬではないか。全く同一の情報に依拠した前記引用の叙述にしても、それぞれに微妙に搖れていよう。現在までの私の探索では、この時点では三好が身の危険を感じるほどの運動への参加を傍証する徵標となるべき材料は全く見当らないのである。大武の判断には、川俣によりかかって、無理に納得しようとする気配が感じられるし、言うところの「官憲弾圧が身辺に及ぶかも知れぬ」ほどに全身的に左翼運動にうち込んでいるものの詩想が、丸三年もの時の経過の中で、なんら影響を蒙らないことの不自然さをこそ思うべきではないか。ましてや、治安維持法体制以前の事ともである。川俣にしても、「左翼運動に入ったにちがいないのである。」「いずれにしても、三好十郎の左翼転換は、大正十二年の秋から冬にかけて、大震災の惨禍のなかで行われたのである。」と断定的に言い切るためには、いささか材料不足ではないのか。むしろ、「全日本無産者芸術聯盟員」であつた三好自身が、『新興文学全集 第十卷』（平凡社）に

付した、昭和三年十月執筆の「小伝」の次の二節を虚心に読み取ることが自然なのはなかろうか。

……大学での勉強はあまりせず、従つて、大して為めにならなかつた。右、栄養不良である間、いろいろな先生と友人に愚説になつた。一々書ききれない。

在学中、吉江喬松先生の力で『早稲田文学』に詩作を発表させて貰ふ。

曲りなりに、でない、大いに曲つたまゝで卒業。

香川県高松市の辻、坪井ミサヲと結婚。

依然たる貧乏。詩作、詩論を方々の雑誌に書きちらす。戦つた。ウロツいた。

そして、野蛮人の血と、社会の状勢が、自分をコンミニズムの方へ連れて来た。

三好の文壇登場に大きく与つたのは、吉江喬松であった。大正十三年六月号の『早稲田文学』は、新進三人の詩作品を紹介した。中山鏡夫の「全音階に於けるドン・キホーテ外一篇」、大山広光の「射翼篇」と、三好十郎の「雨夜三曲外四篇」である。翌月号には、同じく大山の「寧楽篇」と、三好の「葵の河原外五篇」が発表され、巻末の「八月号豫告」文の末尾には、次の語が見える。

……本誌六、七月所載の詩で、夙くも詩壇に認められつゝある新進詩人三好十郎氏の長篇抒事詩『唯物神』を添えて三好の二十三頁に恐らく現詩壇における一つの驚異であるであらう、『唯物神』を始め、其他、評論に創作に精進した記事を掲載いたします。

そして八月号に、吉江のオマージュに満ちた推輓の辞「若き詩人等と叙事詩『唯物神』」を添えて三好の二十三頁に及ぶ『唯物神』第一篇「山中の虹」が、誌上を飾つた。吉江は前記の一文で、前出の中山、大山の詩人としての特性を称揚した上、

三好十郎君は、この三人の中で、最も呼吸の太く、たしかな人である。この人は豪邁な精気を、十分に現はして行く余力を備へてゐる。最初未来派流の繪画詩に於てその特殊な天分を見せてゐたが、近來はそれが一層自由な現れをなすやうになつて來た。

個人生活を徹底的に究極して見て、やがてその究極したる、若しくは解放したる個々人を基礎としたる災合生活を

つくりいださんとする努力現象が、現代に於て到處に見られてゐるのである。この努力が今日に於ける世界苦であり、その文芸的表現を新人等は求めでやまぬのである。
浪漫派、高踏派、象徴派を経て、今日は、新らしき意味の集合生活に代縛し、若しくは暗黙の裡に、その集合生活の合作機関に身をなすのが現代詩の使命である。…………この詩には最も好き意味の眞の若さが充ちあふれてゐる。確かに足どりと、開かれた官能の爽かさと、心眼を見開いて新たに模する自然と人間との原始の姿と、それ等をつゝむ豊かな律動とがある。たしかにこの若い詩人の前方に開かれた地平線は、無限の広さをもつてゐる。運営の光と、官能の統一と、広き環境の呼吸とに全身を委かせ、一意の精進を切に希望する。

吉江がいう「未來派流の繪画詩」とは、阪井徳三が「十郎三好の若い断片」(『新日本文学』昭和34・2)で回想した「吉江氏をたずねた最初のとき、私は詩の原稿をポケットにしていたが、彼はカンジンスキイぱりの油絵をたゞさえ、これが私の詩ですと言つていた」というエピソードを想起させる。戸塚のY.M.C.Aの寄宿舎「信愛學舎」で三年近く一緒にあつた学友神崎重男が大武の編集した「三好十郎著作集会報 7」(昭和36・5)に書いているように、吉江を訪れる機縁となつたのは、三好が吉江の散文詩「青色の室」を一読傾聴したことによる。二松堂版『文芸年鑑』大正十五年版の「大正十四年の文壇」中に「詩壇」を回顧して次の記述がある。

また、稿末は次の言葉で結ばれている。

吉江喬松氏及び日夏秋之介氏を中心として集るものは、主として早稲田出身の若い詩人であつて、即ち、三好十郎氏、中山鏡夫氏、大山廣光氏、酒井得三氏、加藤憲治氏等である。会名を「青色の室」といつて、時々詩の展覧会を開催したり、パンフレットを発刊しようとしたりして、新鮮なる本統の詩を生み出さうとする気配を示してゐる。強いてその大体の調子を捉撃するトスレバ、彼等はあまりに非売名的でありすぎることだ。

本年度詩壇の生んだ新進有為の人として、先づ三好十郎氏を推薦したい。先に三好氏の長編叙事詩が吉江喬松氏の紹介で早稲田文学に掲載された時、文壇の人三上於菟吉氏は、三好氏の発見によつて、早稲田文学の存在の意義が新たにされた云々の讃辞を送つた程である。それによつても三好氏の天分がいかに優れたものであるかが分る。
次ぎに推薦したいのは、吉田一穂氏である。大山廣光氏が文章俱楽部で本年詩壇の概観を述べてゐる一文中でも、同氏を推賞してゐたが、夙に新興詩人としてもつとも優遇されなくてはならない人である。三好氏も吉田氏も近

く第一詩集が上梓される筈である⁽⁵⁾。共に将来ある人として特記しておく次第である。

吉江喬松が、三好の文壇デビューに大きく関わっただけではなく、三好や阪井らがその後「社会詩」への道をたどるにあたっても少なからず影響を及ぼしたことについて、阪井は前記の回想文で触れている。

そのときの十郎君は、その評価を一般的な場合とは別の次元で——すなわち彼が最後にはそこにかえってゆくことになつたエゴの認識の形でおこなつたはずだった。というより、あるいは、彼の考えていたエゴの考え方だが、このころから社会的な改革のジグザグと結びつかずにおれないようになってきていたからだ。

中野の私の姑の家で、十郎、日吉草苗との三人で詩の批評会をやつた。
彼は学校がおわって京王沿線に住むようになったころ、私たちの笑ひ草になるような形でまで犬を愛したことがある。

そのころの十郎の考え方には、ほぼ統一的な見解を求めて見れば、ゴッホ——イプセンの線だったろうか。だから社会主義に関連して、楽天主義、人間信頼、群衆崇拜などの感覚が安っぽく出てくるとなると、彼の自説論もまた必要以上に（彼がすぐ自分で気づくほどに）まがって頑強になる。「貧乏」という灰色の教科書の暗示のゆえか彼よりすこしはやく社会主義の考え方傾いていたようだつた私は、よく顔色をかえての彼のギロチンに面接しなければならなかつたわけだ。だが彼は私の叙事詩が「社会詩」への方向をもとうとすることについては、それを支持し援助していた。ふたりは、ふたりなりに、そういう方法の探求者であり、同時に競争者であった。ふたりでよく吉江喬松教授のところへ詩の批評を求めていた。吉江氏の詩の批評には、たいへん鋭いものがあった、同時に私たちを社会詩へと言葉ゆたかにみちびいていた。

ここに回想されていることどもは、大正十四年から十五年にかけてのことと推定されるが、この大正、昭和にわたる一九二六年前後が、三好十郎の生涯の大きな節目となる時機で、前年には、女学校で教職にあつた坪井操との結婚もあり、生活的にも一応の安定をみた時期である。後年の詩「水尾」（『麿麿』昭和10・11）は、愛妻への悲痛な挽歌であるが、次に掲げる三好の詩「馬鹿が言ふ言葉」（『我鏡』昭和2・9）は、それと対をなす新妻へのみずみずしい讃美歌である。

お前は世界中で一番美しい！

お前は川だ。

首すじは白い早瀬で
乳房と乳房の間は、それ、谷川だ
谷川の両岸には、ふくれる涙
あれよ、赤い苺が浮いてゐる。
もつと下の双子山に乗れば
日と月が一緒に見える。

お前は山だ。

高くて、低くて、みんなカーヴだ
腕の附根の凹地では
百合花の匂ひがするし、
あれよ、赤い苺が浮いてゐる。
もつと下の双子山に乗れば
日と月が一緒に見える。

お前は海だ。

ヌラヌラと手に触れるのは
青い漢だ。黒い髪。
思ひがけない眼のわきの笑くばが
グルグルと渦を巻いて底は奈落さ。
雪の二つの膝頭、
満潮の下の海底、
二つの黒潮に囲まれて、あゝ
洞がある。暗くて鬼がある。

お前は世界中で一番美しい！

大正十五年九月は、三好の詩「雪と顔と煙草の進軍」が『文芸戦線』に掲載され、その「編輯後記」で山田清三郎は、

日本には未だ健康な、集団意識の中から生れた、勃興階級の詩といふものが、現れてゐないのではないかと思ふ。プロレタリアの詩と目すべきものはないでもない。がどうも、個人主義的な感情を基調とした、ヒステリカルなものが多いやうである。かかる場合本号所載三好十郎君作の詩の如きを見出すことの出来たのは、たしかに喜ぶべき一つの「愉快な傾向」であるといつても、差支へはないやうな気がする。本誌五月号に掲載した、松本淳三君の「労働祭歌」と共に、プロレタリア詩壇最近の収穫であると思ふ。

と記した。そして同号の巻頭を飾ったのが、青野季吉の、あの「自然生長と目的意識」論であった。この月には、三好を中心として上野壯夫・阪井徳三らと同人詩誌『アクション』が創刊され、(左翼詩の提携) (プロレット・カルト) (左翼共同戦線へ向つての絶えざる突進) が譲われた。海保俊郎・辻藤栄・菅原芳助・藤田心らが名を連ね、齋井繁治・高橋新吉・新島栄治の寄稿もあった。昭和三年二月に創立大会を開いた左翼芸術同盟は、弁証法的アナキストなどと呼ばれていた壺井・江森盛弥・高橋勝之・工藤信等の一群と三好・阪井・明石鉄也・上田進・高見順らが合流し、無產階級芸術戦線の統一を宣言葉にコミュニズムへの思想的転換が図られ、機關誌『左翼藝術』の発刊と相前後してナップ創立に参加する。三好の左翼運動への参加を言うのであれば、やはり、一九二六年の後半から二七年(昭和二年)にかけてのこの時期を考えるのが、妥当であるだろう。

ここまで三好の著作活動で、三好まりの「資料」に洩れたものを幾つか補うと、一九二六年一月創刊の『文章往来』(春陽堂) 詩「秋篇」と、「英米文壇の消息」と題してのアーサー・ウエリーの英訳「源氏物語」とコソラードの遺作の紹介がある。二月十日付で、早稲田大学教授青江喬松・山岸光宣・日高只一監修の『世界文芸物語叢書IV』の三好十郎述『ホーマー舊譜イリアッド』(文教書院)が刊行されている。『朝新聞』には、「雑文雑誌」(2月13日)「寒鷗と白鳥」(3月30日)「唯美主義の根柢」(6月7日・10日)を執筆し、この年、『文章往来』の投稿欄「文章往来詩」の述者

をつとめている。昭和二年三月『文章俱楽部』特集(大正文壇總勘定)で生田春月は「大正年間の詩と詩人とに就て」を書き、その一節に「……特に、コンミニズム・アナアキズムの詩人が現れて、ために当初からその意義の薄弱であった民衆詩人の主張の無意味であった事を暴露した事、この無産派詩人には、松本淳三、三好十郎、齋藤恭次郎、野村吉哉、小野十三郎氏等ある事」と回顧した。『文藝』(昭和2年4月)の(後継詩人号)に詩論「詩が書けなくなれ！」を書いたことは「資料」にも記載されているが、その外(現詩壇に対する感想要望)なるアンケートにも答えている。なお、この小林鶯里主幹、經營の『文藝』誌をはじめ、前出の『アクション』『我體』『左翼藝術』については、かつて『近代文学雑誌事典』(昭和41・1、至文堂)に執筆した拙稿がある。

今回は、三好の左翼運動加入の時をもって終るが、続く何回かの「ノート」では三好の「転向」の内実にどこまで迫れるかが主要な課題となる。その過程で、たとえば桜井書店主秋井均が、その著『泰落の作者』(昭53・8・文治堂書店)で、三好は「峯の雪」が活字になつていたならば(戦後)を別のかたちで出発したのではないかという問題、あるいは、宮岸泰治が『劇作家の転向』(昭和47・10 未来社)で「敗戦期の三好十郎、森本薫らの諸作に欠けていたのは、転向の意識だった。前章にみたように過去を一切仕方のなかつたことだとする姿勢は、考えてみれば軍国主義者たちが昨日までの証拠の湮滅を急いだ姿勢と大差なかった。」とする言なども検討されることとなる。かつての拙稿「三好十郎」(『現代日本文学大事典』明治書院版)に次の二節がある。

戦時下最後の作品となり未発表に終わった「峯の雪」(昭一九)は、周圍に抗して頑なに藝術的矜持を守りつづけてきた老陶工が、戦争協力の碍子作りに踏み切る心理の屈折を描いたものであるが、名人治平の心の(側)は、そのまま作者その人の心中の劇であつたに違いない。八月一日の敗戦の現実は、三好十郎にとって「解放」であると同時に、自らを(民族と運命と共にしようとした)戦争からの必死の立ち直りをも迫るものであった。彼は敗戦を契機として、自らの血のしたたるような附分けを通して、戦前の重厚な転向を完了する。……

これらの叙述の当否も検証し直すことになろうが、三好の転向をもつて(重厚)とする一点においては、私の考え今に、いささかも変らない。(戦後)を疑つて、自らを問うことを知らぬかにみえる、かつての三好の論争相手清水幾太郎のそれに比すると、その感は一入である。そのこともいづれあらためてこの「ノート」で触れることとなる

う。因みに尋ねば、稿者高橋は、かつての日、清水の「社会学」講義の名題子を聴いた受講生の一人である。

注1

一九八三年十二月、深夜叢書社刊。「本書は、前著『現代史の癡古』の『本編』にあるものである。つまり、前著では『進歩的』知識人の批判を通じて自己史の問題を提起したが、本書では、三好十郎との対話というかたちで、その問題の具体的な追及を試みた」(あとがき)。

注2

『現代史の観点(進歩的)』知識人論(深夜叢書社刊)。一九八二年八月、増補新版。

一九五八年七月、京都、三月書房(一九五〇年三月、宍戸創立)刊。副題「学内闘争の歴史」

注3
信夫清三郎・渡部徹・小山弘健編、青木書店、六月刊。第三卷別題「高揚と壊滅」。

三好も同人だった草野心平編集発行の詩誌『銅鑼』第六号(大正15・2)の編集「後記」にも「三好君は近く、詩集『唯物神』とバイロン譚を出す。」とあるが、この詩集は未刊に終った。吉田一穂の第一詩集『海の聖母』は金星堂から刊行された(大正15・11)。なお、新潮社の『文豪譚伝叢書(5)』のジョン・ニコル著・三好十郎訳『バイロン』(大正15・7・8)は、吉井鶴松・日高真一の推進による。「私のこの『バイロン伝』は、ニコルの『バイロン伝』の逐字訳では無い。それに、所に依つては、不必要と思はれる所を省略し、不勉強と思はれる個所には追加をほどこした。」もので、第十章の末尾は次の言葉で結ばれている。「父も母も生きてゐたとは言ふものの、幼時バイロンは、事實上に於ては孤児であつた」